

2022

3

令和4年3月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻343号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあるお



さわやか福祉財団

コロナ禍を乗り越えて共生社会へ 「地域助け合い基金」で

あなたの気持ちを助け合いの力に活かしませんか？

こんなふうに役立っています！ 皆様のご寄付



子ども食堂がコロナ禍で配食

コロナ禍の影響を受けている家庭に
夕食と休校中の昼食を配布し、新た
な子ども食堂利用者やボランティア
参加等の効果

神奈川県
藤沢市

米・食材代、炊飯器購入、
光熱費等を助成

中山間地の助け合いとして、
移動支援や草取り等の有償
の助け合い活動を立ち上げ

群馬県
高崎市

立ち上げのための事務用品費・通信費を助成



東京都
狛江市

福祉・教育関係者が
居場所と支援を開始

ゆるやかにつながり、有用
な支援につなげるため、近隣市民と協働で
居場所を立ち上げ、生活支援も実施
立ち上げ期の賃借料とインターネット利用料を助成



有償ボランティア団体
立ち上げ

ご支援、ご寄付を どうぞよろしくお願いいたします。



公益財団法人

さわやか福祉財団



財団ホームページ内
基金関連ページ

※詳細は、24ページをご参照ください。

さあ、言おう

2022年3月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

ますます重要な地域による子育て・子育て支援

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 挑む! 我らの地域づくり

小さな町の熱き協議体と 気概あふれる生活支援コーディネーター

長野県小布施町

11 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

おばあちゃんへの思いをボランティアに 大学生たちの生活支援活動

まごのて (北海道札幌市)

18「地域助け合い基金」助成先のご紹介／状況のご報告

22 連載 14 老いの暮らしを創る

遺骨はどこへ

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・ 助け合いの地域づくり

26 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

33 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー (賛助会員)・ご寄付者の皆様のご紹介

35 NEWS & にゅーす

37 活動日記 (抄)

㊦「基金」ご寄付のご案内

㊦『さあ、やろう』 vol.18予告

㊦全国交流フォーラムのご案内

㊦みんなの広場 / 投稿募集

㊦さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう! 新・ひとりごと・佐藤 良子

ますます重要な地域による 子育て・子育て支援

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

また、起きてしまった。このところ、頻繁に児童虐待のニュースが流れてくる。どうして我が子にそんなにひどいことができるのかと、報道に触れる度にやるせない思いで心が痛む。国の公表資料によれば、日本では今、およそ5日に1人という恐ろしい割合で、虐待により子どもの命が失われている。無理心中がそのうち3割弱、心中以外が7割で、実の母親が加害者として半分を占めている。亡くなった子どもの8割が10歳以下だ。

ただ実態はもっと深刻ではないかと感じる。児童虐待は年々増えており、全国の児童相談所と市町村の相談対応件数は合計で30万件を超えた。重複した相談もあるだろうが、そもそも表面化していないものも類推すると、さらに多くの痛ましい虐待死が見逃されているとも考えられる。何よりも早期発見・早期対応が不可欠だが、家庭・家族はいわば密閉された関係。公的な機関の体制だけでは不可能で、解決には、地域の目、地域の力が改めて必要とされている。

コロナ禍の中、地域で子どもを見守り、育てようという意識を持って活動する人たちは確実に増えてきたように思える。子ども食堂は全国に広がり、多世代の居場所でも高齢者や若い学生らが子どもたちと楽しく支え合いながら交流している。しかし、障がいがあり、あるいは長

く病気を患う子どもへの地域活動はどうだろうか。まだどこも非常に少ないのが実態だろう。昨年9月に医療的ケア児支援法が施行された。国と自治体は、医療的ケアを必要とする子どもたちの生活を家族任せにせず、社会全体で支える仕組みづくりを強化する責務を負う。人工呼吸器を使ったり、たんの吸引や胃ろうなどのサポートが日常的に必要な「医療的ケア児」は、全国でおよそ2万人いるという。新生児医療の進展によりその数は増えていく一方で、その後の支援体制はまったく脆弱だ。医療任せにしておけばいいわけはなく、その後のその子たちの日常生活や交流・学習の機会をどう支援していけるのか。多くは親が自宅で昼夜世話をしており、受け入れ保育所も不足し、離職も少なくない。できるだけ自宅や施設・病院への訪問教育から移行し、家族の付き添い無しでも通学できるように、保育所や学校等への看護師や保育士等の配置が進められているが、予算の壁もあり十分とはいえない状況だ。

そこで、地域の出番だろう。買い物支援や病院や学校への送迎など通常の助け合い活動でできることは様々ある。親がちよっとの時間、別部屋で休息できるように子どもを見守ることでいい。NPOが専門職と連携して居場所活動や体験旅行を行うなどの取り組みは以前から少しずつ行われてきた。子どもは様々な人とのあたたかなふれあいの中で自我を育て、共感力を高めていく。閉ざされがちな環境で精一杯暮らす子どもたちにとって地域の人々とのふれあいはとても大切なものになるはずだ。親のストレス過多、虐待への負の連鎖も防止でき、何よりも理解してくれているという安心感が孤軍奮闘している家族の気持ちを支えることだろう。

折しも、こども家庭庁が来年発足することとなった。今のところ地域との関係、役割をどう位置づけるかがはっきりと見えてきていない。地域共生をうたう今、すべての「こどもまんなか社会」（基本方針）のためには、なおさら地域住民の理解と参加が不可欠といえるだろう。

広げよう つなげよう 地域助け合い

挑む！
我らの地域づくり



小さな町の熱き協議体と 気概あふれる生活支援コーディネーター

長野県小布施町

住み慣れた地域で最後まで安心して暮らすために、全国で住民主体の協議体が熱心に活動しています。今月号は、住民同士が本音でぶつかり合いながら諦めずに話し合いを続け、「ピンチをチャンスに！」を合言葉に、助け合い活動を創出した協議体。そして、それを支える生活支援コーディネーターの奮闘ぶりをお伝えします。

（取材：文／塩瀬 潔泉）

長野県北東部、人口約1万1000人。半径約2キロに収まる、県内で一番面積が小さな町、小布施町。2015年から生活支援体制整備事業に取り

かかり、17年から第1層生活支援コーディネーター（SC）を務めるのは、同町社会福祉協議会の伊藤由花さん（49歳）。SCになる前は社協でシニ



小布施町第1層SCの伊藤さん。笑顔がとても素敵な人だ

アクラブなどを担当し、マレットゴルフ等に参加していた夫婦が、ある時期から妻が弱って出てこなくなるような現状を見てきた。

「社協入職前は、介護福祉士として特養や居宅のヘルパーの仕事をしていま

した。その頃から、介護保険サービスだけで高齢者の生活は支えきれなくなっているし、子どもも減っていく。住民のやる気で地域を何とかしていかないと、という危機感がありました」

(伊藤さん)

身近な助け合いって…?

小布施町は16年、行政が中心となり、町全体で身近な助け合いを考える地域包括ケア推進懇話会「あったかい議」

を結成。途中からは伊藤さんも加わり、グループワーク等で11回会議を行った。その中で、小さな町なのに、住民が考える「身近」と行政のそれとが合致していない、ということがわかってきた。「そういうことは行政にやってほしい」といった声も聞こえてきたそうだ。そこで、もっと小地域での話し合いを、と伊藤さんらが自治会連合会の会議等で声かけを行ったところ、町内に27あ

る自治会で唯一手を挙げたのが松村自治会だった。当時の松村自治会長は、現在の第2層協議体「ハッピーライフまつぼっくり」の会長を務める長田光男さん(72歳)。会社員時代は転勤族だったが、親の看取りの経験などから、助け合いは必要という考えを自分事として持っている、と伊藤さんは言う。

こうして、伊藤さんと松村自治会の助け合い活動創出への道のりがスタートした。

第2層協議体 「ハッピーライフまつぼっくり」

「ハッピーライフまつぼっくり」は、地区の公会堂で夜7時頃から月1回のペースで会議を行っている。しかし、取材したこの日はコロナの感染再拡大の時期だったことから、町社協の会議室で距離を取って開催。参加人数も15〜18人ほどだが、この日は少



協議体の様子

なくなり、メンバー以外の関係者も含めて11人となった。

1月に県内で開催された移動支援・外出支援を考えるフォーラムに参加した事務局の高野薫さんは、「モ



デル事業として多額の予算が付いた取り組み等も紹介されて、興味深かった。でも、お金をかけなくてもできる4キロ四方の小布施らしいやり方、小布施の強みについても考えさせられる内容

◇ 協議体「まつぼっくり」座談会 ◇

● 何も決まらない会議

協議体編成のための勉強会を18年4月から3回行い、そこから同年9月に協議体として活動し始めたまつぼっくり。しかし――。

長田さん 最初はみんな、ただ説明を聞いてるだけ。何も決まらない会議（苦笑）。私も、自治会長という立場や「スタートしたんだから」という義務感でやっている部分がありました。

助け合い部部长・矢島清史さん（69歳）私もそのときちょうど自治会役員になったので、立場上出ていましたけど、

だった」と報告。ほかにも、「この小布施で、松村で年を取るということ」「行政の下請けではない、お仕着せでない活動」といった発言が印象的な話し合いだった。前の週から増えてきた

みんな自分の思いだけ言い合って、「こりや大変だ」と思いました。

事務局・岡埜哲郎さん（76歳）私も、勉強会に1度出たときは、自分のいる場所じゃない感じがしました。助け合っていかないとみんな思ってるけど、堂々巡り。

長田さん そもそも、みんな協議体って何なのか分かってなかったね。

伊藤さん それでも、やっぱり皆さん毎回出ていらっしやいましたよね。

● 失敗してもいい、やってみようよ

伊藤さん まつぼっくりが発足して何回目かに、高野さんを含めて3人、新メンバーが参加してくれたんですが、

積雪について、助け合い部からは、「除雪の依頼が多く、これから大変になる」といった報告もされていた。行政の除雪は公道までで、雪の多い地方で自宅前の除雪は深刻な問題だ。

高野さんは町全体のまちづくり委員会に入られていたり、子ども食堂に関わられたりしていたので、お誘いしました。

高野さん 生協の助け合い活動もやっていますが、組合員150人ほどが町全体に点在していて、例えばたくさん降ったときの雪かきに本当に駆けつけられるのか。やはり向こう三軒両隣の助け合いが必要では、という思いはありました。でも、こういう話し合いってどうしても声が大きい人がいたりして、その他の人はなかなか発言できない。

居場所づくり部部长・宮澤洋子さん（70歳）初期の頃、みんなただ言っ



取材時の協議体に参加された皆さん

(前列左から、宮澤さん、高野さん、林かおるさん、小淵由美子さん、岡埜さん。後列左から、伊藤さん、地域包括支援センター所長・本間千恵子さん、民生委員・堀込祐子さん、長田さん、矢島さん、町社協事務局長・川上貴浩さん)

てるだけのときは、私も本当に我慢して聞いていたけど、いい加減に少し言ったほうがすっきりすると思って。そ

れで発言したこともありました。(高野) 薫さんは、好き勝手に飛び交うみんなの意見を元に引き戻したり、問題点はどこなのか示してくれたり。

それでいて、誰に肩入れするでもなく自分の意見を押し付けるでもない。みんなより若い年代で女性だったのもよかったんだと思います。

伊藤さん 新メンバーがそんなまっつくりの様子を見て、「話し合いしてるけど、何もやってないね」と。そうしたら立ち上げメンバーの皆さんが、「やるよ！これからやるんだよ」と。もう毎回けんか腰で、すごかったです(笑)。

宮澤さん でも伊藤さんは本当に辛抱強く、それまでの堂々巡りや言い合いにも付き合ってくれてね。伊藤さんがいなかったら、もうとっくにだめになってました。

伊藤さん とにかく「やってください」と頼むようなことは言わな

いようにしようと。言ったが最後、住民さん主体のはずが「伊藤さんがやれって言った」となります。だから、ひたすら「どうしたらいいかな」「どうしますか？」って。

長田さん そんな中で、岡埜さんの「まず居場所企画を3回やってみよう。失敗してもいいじゃない」という発言で、やっと活動がスタートできたんだよね。

● コロナ禍でのシフトチェンジ

岡埜さん そこからみんなで役を決めたり規約を作ったりして、さわやかさんから提供してもらった『居場所ガイドブック』なども役に立ちました。

長田さん あとは、新潟の「実家の茶の間・紫竹」や大阪サミットにみんなで行きましたけど、いろんなやり方、考え方があるんだと、本当に勉強になりました。

伊藤さん 町から「こんなに大人数で行くんですか」と言われましたけど、「行くんです！」と(笑)。

宮澤さん 居場所とは、イベントや開放日も設けたりしながら月に2回ぐらい公会堂でやったんですが、コロナ禍になって20年2月で休止になっています。高野さん でもね、居場所が休止になっちゃったことで、「じゃあどうしようか」って思考がシフトチェンジしたと思う。

伊藤さん 4月から5月頃になって、「居場所ができないなら、やっぱり本質の助け合いじゃないか」と。「もうだめだから、まっぼっくりもやめよう」とはならなかったですね。

高野さん 除雪にしてもごみ出しにしても、ただ「やればいい」じゃなくて、顔を出してつながることが大事。そういう助け合いの本質が理解されてるんだなあ、と思いました。

岡埜さん 月1回発行のかわら版も、「コロナでどうしようか」となりまして、やっぱりできるだけ頑張っ出ていこう、続けよう。

宮澤さん 意外と住民の皆さんは、見

てないようで見えますよ、かわら版。

*かわら版は、まっぼっくりからのメッセージや有償ボランティアの紹介等を掲載し、町内会に全戸配布している。

● 助け合い活動の始まり

長田さん 私は今、お隣の60代の一人暮らしの男性の除雪とごみ出しを手伝ってるんですが、以前はちよっと付き合いいくいなと思ってたんです。でも介護保険の対象にはならないしということでも最初、町から依頼があつて、それをまっぼっくりでやってみたいと思つて。

伊藤さん それで、まっぼっくりで居場所をやったときに、その男性をお誘いしたら楽しみにして来てくださったんです。居場所が休止してからも、何かあるとかかわら版を手に「まっぼっくり、まっぼっくり」って、本当に心の支えにしてくださってるんですよ。

長田さん その方の向こうのお隣に

「ご本人、体も弱ってきているし一緒に手伝えないか」と相談したら快く受けてくれました。そうこうしてるうちに、雪かきやってたら、ご本人がトイレの窓を開けて「ありがとう」って。朝6時頃でしたけど、もうその一言でね。

矢島さん 私は、自治会役員だった頃、住民さんが一人きりで亡くなっていたという話を聞いたところから始まってるんです。声をかけやすい雰囲気と、そこに応えられる人たちの意識を、松村でみんな一緒になってつくっていかれたらと思います。

助け合いの現場

～ 早朝の除雪とごみ出し ～

早朝6時半。前夜からの雪は2センチ以上は積もっていた。伊藤さんと一緒に、要介護で車いす生活の藤本昇さん（85歳）のお宅を訪問。まだ暗く、雪も降り続く中、大きなスコップで玄

ご近所の助け合いにうれしい驚き

株式会社ケアネット

藤本昇さん担当ケアマネジャー

山崎 栄美さん

藤本昇様は、助け合って生活していた奥様が施設に入られてから、大事な猫ちゃんとの在宅生活にも困りごとが増えました。

そんな折、ご自宅でのサービス担当者会議にまつぼっくりの宮崎様とSCの伊藤様が出席してくださり、藤本則夫様と昇様とのつながりについて情報を下さいました。

介護保険サービスだけで利用者様の困りごとをすべて解決できるとは限りませんので、ケアマネジャーは皆、常に地域資源の情報を収集し、支援に生かすようにしています。ご近所の助け合いは、「あったらいいな…」とは思っていましたが、まつぼっくりさんのことを知ったときは、「本当にあったんだ！」と、うれしい衝撃を受けました。昇様の生活に即した、顔の見える支援が得られることにとっても安心しましたし、ケアプランに組み入れることができてよかったと思っています。

負担が重すぎる」という意見があり、支援には2人以上の担当が付く。また、それまでまつぼっくりの支援内容に資源ごみの搬出はあったが可燃ごみはなかった。しかしそこで終わらせず、副会長の宮崎徳三さん（76歳）が則夫さんのところに相

関先の雪を除けていたのは、大通りを挟んで斜め向かいに住む藤本則夫さん（70歳）。まつぼっくりの助け合い部員だ。除雪を終えると、玄關脇に置かれた大きなごみ袋を2つ持つて、徒歩数分のごみ収集所へと歩き始めた。可燃ごみは、朝6時半から7時に出すことになっている。

昨年3月に昇さんの奥さんが倒れ施

設に入る前から、隣の市に住む昇さんの妹が来て家事を手伝い、可燃ごみも車で持ち帰って自宅のほうで捨てていた。しかし、飼っている猫の排泄シート等は車で持ち帰るには臭いが気になるし、月に何度も通うことに「少し疲れた」と漏らしてもいたそうだった。

「昇さんの妹さんと私は同級生で、昔は家も隣だったし、昇さん宅の雪かき

はこれまでもやっていました。だからまつぼっくりから可燃ごみを出す話があったときも、抵抗はまったくなかったですよ」と則夫さん。この日、昇さんとは会えなかったが、2人は電話でよく話をするそうだった。則夫さんの都合が悪いときは、同じく助け合い部員の藤本勉さんが代わってくれる。まつぼ

っくりの話し合いの中で、「ボランティアで1対1の支援は



昇さんの自宅前の除雪と
ごみ出しをする則夫さん



談に行き支援が実現。

「これは、皆さんの機動力があったからできた助け合いです」と伊藤さん。これ以外にもまつぼっくりには、運転免許を返納した人の買い物や通院の支援、草刈り等のニーズが上がってきている。

まつぼっくりの有償ボランティアはチケット制で、除雪は1回につきチケット3枚（300円）、可燃ごみはチケット1枚（100円）。居場所の参加にも使える。

* * *

SCとなつて以降、伊藤さんは分かりやすい資料で説明したり、神奈川サミットのポスター展の結果（11位入賞）を報告したり、行政や町全体に何とか関心を持ってもらいたいと努力を重ねてきた。その甲斐あって昨春秋、関係者の会議の場で町役場からも生活支援

体制整備事業に力を入れていくと発言があった。

「私はそこで、『ぜひ町長にそれを発信してほしい』と申し上げました」と伊藤さん。

そして今年、桜井昌季町長は年頭のあいさつで「地域における支え合いの組織づくりをさらに充実・発展させていきます」と宣言した。

有償ボランティアまで創出したまつぼっくりの活動を知り「うちでもやってみたい」と相談してきた自治会と、伊藤さんは協議体発足に向けた勉強会を始めている。それ以外にも2、3の自治会が関心を持ち始めているという。伊藤さんは熱く語る。

「支えているようで、支えられている。すべての人が、まるっとぐるりにつながっている。それが小布施から隣町、長野、日本全体に広がっていつて、目指すところは世界平和なんです！」



おばあちゃんへの思いをボランティアに 大学生たちの生活支援活動

まごのて（北海道札幌市）

コロナ禍での自粛が続く中、大学生たちが声をかけ合って有償ボランティア団体を設立しました。きっかけは、発起人となった学生が、祖母の困りごとを抱える姿を見たことだったといいます。地域の生活支援コーディネーターや各種機関とも連携して、持続可能な運営に真摯に取り組む彼らの活動を紹介します。

（取材：文／城石 真紀子）



まごのてキャラクター

困りごとを抱える祖母の姿が
活動のきっかけに

人口約196万人、北海道一の大都市、札幌市。北海道大学（北大）をは

じめとする15の大学のほか、短期大学や専門学校も多い。

そんな札幌市で活動する「まごのて」

は、北大生を中心とした大学生による有償ボランティア団体だ。2年以上続

くコロナ禍も相まって、普段利用していた福祉サービスが受けられなくなつた高齢者や、自分だけでは自粛生活が困難な地域住民に対して、日常のちょっとした困りごとを手助けする生活支

援活動を行っている。高齢者から見ても孫世代であること、また、かゆい所に手が届く支援をしたい、というのが団体名の由来だ。

発起人は、北大農学部4年生の澤田優さん。祖母が要介護認定を受け、介護保険サービスだけでは在宅生活が難しい状況を目の当たりにしたのがきっかけで、「困っている高齢者のために活動したい」と思い立ったという。そして、学部同期の真島康誉さん（ましまよしたか）と、法学部4年で同じ軽音サークルに所属する山下怜さん（れい）と共に、3年次だった2020年4月にまごのてを設立。現在は、真島さんが代表、澤田さんが副代表、山下さんが会計を務め、役員として3人が中心となって運営している。立ち上げメンバーに加わった理由について、真島さんは「大学に入ってから学習支援ボランティアをはじめ、いろいろなボランティア活動をやっていたので、話

を聞いて面白そうだなと思った」という。一方、

山下さんは「誘いを受けて、そんな活動をしようと考えようと思ったこと。最初はびっくりしました。ただただすごいなあと。これまでボランティアに目を向けたことはなかったけれど、自分にできることがあるならやってみようかな、という気持ちにもなりまして」と語る。そして、仲間集めのため、新型コロナウイルス感染拡大で、講義、サークル活動、アルバイトなどが制限され、活動の場を求めている学



会計の山下さん



代表の真島さん

生が多い時期だったこともあり、すぐに10人ほどが集まった。

「有償にしたのは、非営利とはいえ活動に対して謝礼の仕組みを設けたいと思ったから。それが活動するメンバーの意欲にもつながるし、依頼される高齢者も気兼ねなく頼めるだろうということ、お互いにウイン・ウインの関係が築きやすいのではないかと考えました」（真島さん）

分らないことは助言を求めて 生活支援コーディネーターも応援

しかし、意欲はあるが、ノウハウもなければニーズや利用者の探し方も分からない。そんな学生たちに、周囲の大人たちが手を差し伸べた。その一つは、団体設立にあたってまごのてがモデルケースにした、兵庫県西宮市で生活支援活動を実践している「NPO法

人なごみ」である。「なごみのことは、テレビを見て知りました。自分たちが目指している団体像とマッチしていると感じ、いきなり連絡して、僕たちも同じことをしたいんですと言っ

たら、『協力するよ』と快諾してくださって。オンライン上で団体設立のノウハウなどを助言していただく中で、地域のニーズを把握する必要があると教えてもらいました。それで、札幌市社会福祉協議会にも同じように相談したところ、活動予定エリアの東区社協を紹介してもらいました」（山下さん）

3人は区社協を訪問。「自分たち学生の力で、何かできることがあるだろうか」と熱く語る彼らを前に、区社協に所属する第2層生活支援コーディネーター、山内典子さんが「応援しま

すよ！」とサポートを約束。区社協主催でボランティア講座を開催してもらい、まごてメンバーは活動する上のルールやマナー、高齢者とのコミュニ



区社協とは定期的に会合を持ち、情報を共有

ニケーションの取り方、車いす介助の仕方などを学ぶことができた。

「メンバーの多くはボランティアの知識や経験がなく、日常的に高齢者の方

と関わる機会もそう多くはありません。また、コロナ禍で始めたこともあって、感染対策にも気を配らなければいけない。ハードルが高く、どうやってそこをクリアしていくかが課題だったので、とてもありがたかった」と真島さん。山下さんは、「講座で教わった傾聴などは、実際に活動を始めてからも、すぐ役立つ役立っています。また、地元自治会や地域包括支援センター、さまざまな専門機関ともつながりができたのは、山内さんのおかげ。僕ら学生だけで活動を始めていたら信用が得にくかったかもしれませんが、『社協と連

携している』という後ろ楯をいただけたのは大きかった」と振り返る。

自分たちでもできることがある。
活動が不安から楽しみに

そんな準備期間を経て、まごのては同年8月から本格始動。当初は区社協や包括などから支援を希望する依頼者を紹介してもらい、事前訪問や活動当日にも山内さんが活動メンバーに同行していたが、慣れるにつれて活動メンバーが主体的に動けるようになっていった。運営体制基盤の確立に必要な資金は、山内さんのアドバイスで当財団の「地域助け合い基金」に申請。その一部で購入した専用携帯電話で利用者からの依頼を直接受けている。そうするうちに、口コミによる直接の依頼も増えてきたという。

「活動実績は、20年度が11件、21年度

は1月末の時点で78件で、トータル89件です。冬の間は除雪が一番多く、季節の変わり目には窓拭きや掃除、夏は庭の草取りなど。そのほか、大型ごみの搬出や買い物代行、パソコン対応などもあります」（山下さん）

学業があるので、活動は学生のキャパシティを超えないよう、無理せずできる範囲で。特に、真島さんや山下さんを含む初期メンバーのほとんどは大学4年生。この1年は卒業論文や試験、就活などで忙しく、互いのスケジュールを調整しながらやりくりしてきた。

「活動はすごく楽しいです。最初はジエネレーションギ



活動の様子（雪かき、部屋の片づけ、大型ごみの搬出）



ヤップというか、話を合わせられるか不安でした。でも、お話好きな方も多くて、自分が知らなかったことをいろいろ聞けるので、今では僕のほうが高齢者の方々とお話しすることを楽しみにしているくらい。現場での経験を重ねるごとに、『自分たちでもできることがあるんだな』と、この活動をやる意義みたいなものがどんどん見えてきて、それが心理面での不安の解消につながったようにも思います」（山下さん）

不便を感じる人たちのことがわかる

まごのてでは障がいのある人の依頼も受けており、真鳥さんは今、一人暮らしで視覚障がいがある50代男性のパソコン対応を担当している。

「視覚障がい者用のパソコンを使って、

ネットショッピングのお手伝いなどをしていきます。その方は普段からヘルパーさんも利用されているのですが、公的サービスはどうしても日常の家事など決まったことだけになります。そうすると、例えば買い物などはタクシーを利用せざるを得ず、10000円のものを買うのに往復で30000円も40000円もかかってしまう。それで、パソコンができる若い人にネットショッピングや会員登録・解除の手続きなどを手伝ってもらいたい、というご依頼でした。

週1回くらいのペースでお邪魔しているのですが、いかに普段僕たちが気づかないところでそういった方が不便を感じているか、またこの方に限らず、障がいを持っていたり、年を取ったりするとどういうことに困るのがわかります。そういうことも含めて、すごく勉強になっています」

普通の学生生活では得られない経験が最大の財産

活動エリアも当初の東区から、公共交通機関で行ける範囲の北区、南区、中央区にも少しずつ拡大中。その一方で、課題は活動メンバーの確保やモチベーション維持だ。

「いわゆる『幽霊部員』もいるし、コロナ禍で新規に1、2年生のメンバーを集めることができず、担い手不足に困っていた時期もありました。でも最近、ホームページなどを見て連絡をくれた他大学の学生とも一緒に活動できるようになりました。メンバーには毎週のオンライン定例会にも極力参加してもらい、実際の活動以外に運営面からもまごのてについて考えてもらう機会を増やして、モチベーションを維持してもらう工夫をしています」（真鳥さん）

そして最大の課題は、来年度以降の活動継続。真島さんは大学院に進むため、引き続き団体には所属するつもりだが、現運営メンバー6人のうち3人は卒業で抜ける。そのため、後任の育成が喫緊の課題だという。

「運営にはなるべく興味のある人に加わってもらい、OJTで支援内容などを引き継いでいければと思っています。また、来年度からスタートできるかどうかはわかりませんが、法人格の取得も検討中です。法人格があると社会的な信用度が高いし、支援内容も含めてもう少し自分たちの活動の幅も広げられるのではないかと。ただ、どんな事業内容にするかはそのときにいるメンバーで最善策を導き出して、自分たちの好きなように運営してほしい。今は一般社団法人化を目指して少しずつ話を進めているところです」（真島さん）

山下さんは、4月からは北大とは別



オンライン定例会

北大生を中心とした大学生による有償ボランティア団体。札幌市内において、高齢者や支援を必要とする地域の人々に対して、日常のちょっとした困りごとをサポートする生活支援活動を行っている。主な支援内容は、買い物代行、掃除、除雪、庭作業、大型ゴミの搬出、PC対応、話し相手など。利用料金は10分以内100円、30分以内500円、その後30分ごと500円。その場で現金決済にて活動者が受け取る仕組み。

まごん

●連絡先／〒001-0010 北海道札幌市北区北十条西4-1

SCビル2F シーズネット内

電話 070-8304-6643

HP <https://magonoteotasuke.wixsite.com/website>

の大学院に進学するため北海道を離れる。しかし、これまでの仲間との団体立ち上げ、活動や利用する人とのふれあいを振り返り、「ただ学生をしていただけでは得られないような経験がたくさんできたことは最大の収穫であり、それが僕らの団体の魅力」と語った。

おばあちゃんを思う大学生の行動から始まった、若者による生活支援の取り組み。今後の継続発展を、大きな期待をもって注目したい。

まごのてを支援する 第2層生活支援コーディネーター 山内 典子さんの話

まごのてのメンバーとの初顔合わせは、20年の6月。生活支援に特化したボランティア、それも学生さんで、という事例はこれまでなかったの、ご相談を受けたとき、ぜひバックアップさせてもらいたいとお話ししました。

そのとき彼らは、すぐにでも活動したいとの意向でしたが、必要な準備が何も整っておらず、さすがにそれは難しい。ただ、学生である時間は有限なので、できるだけ早く活動させてあげたいとも考え、打ち合わせを重ねて最低限のことだけ決めて、「あとは走りながら一緒に考えていこう」と、ボランティア講座開催など活動開始の準備をしました。そして、たまたま8月に草刈りの依頼が社協に入っていたので、やってみないかと打診。それが、まごのての第1回目の活動となりました。

その草刈り支援には私も同行したのですが、炎天下にもかかわらず一生懸命やってくれました。依頼者の方も、若い人が来て話し相手にもなりながら

作業をしてくれたことに大変喜んでいらっしゃいました。それ以降、彼らは初めての経験ばかりで模索しながらも、活動と向き合って進んできました。私も生活支援コーディネーターとしてその思いに寄り添いながら、関係機関とも連携して支援を続けています。

まごのては、自立して運営全般を自分たちで担い、コロナ禍であっても支援を休止することはありません。そこには、自分たちがコロナ禍だったから立ち上がったという自負もあるのでしょう。また、経験を積み、団体として着実に質が向上していることも頼もしい限りです。生活支援のボランティアをする学生はまだまだ少ないのが実情ですが、若者がもっとこうした活動に関心を持ってくれたらうれしいですね。彼らにしても今回、高齢者とふれあって学んだことがいろいろあったようなので、それをぜひこれからの人生に役立ててもらいたいと願っています。

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、コロナ禍での困りごと解決のための活動や、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みを支援している「地域助け合い基金」。今月号は、コロナ禍でのサロン開催の工夫、送迎と居場所の活動継続、食糧支援の3団体を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに続々アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

福島県本宮市

コロナ禍でも集まれる屋外のサロン 形を変えたことで新たな参加者も

糠沢5区ふれあいサロン

助成金額 10万円

糠沢5区ふれあいサロンでは、2018年3月から毎月1回集会所でサロンを開催してきましたが、コロナ禍で20

年3月に休止となりました。それに代わる活動として、3密にならない地域の高齢者の通いの場を集落ごとに確保しようとして、「ご近所サロン」を開始。風通しの良い民家の軒先などで、靴を履いたまま少人数で短時間、お茶飲みをするもので、同年7～9月で計7日実施しました。近所での開催により、身体が不自由な人、介護でまとまった時間が取れない人など、集会所でのサロンでは見かけない人も参加するという効果が見られたそうです。

21年度は集会所サロンとご近所サロンを並行して開催す

ることになりました。また、ご近所サロンの設営のために借り上げたワゴン車を両サロンの送迎にも活用して、高齢者が参加しやすい環境が整ったとことです。

本基金の助成金は、ご近所サロン開催のための折り畳みテーブルや折り畳みイス、屋外用電気コードリール、給湯ポット、消耗品、茶菓等の購入や、会場使用謝礼金、ボランティア保険料等に活用されました。

ご近所サロンは、1年目は夕方、2年目は午前中に開催するなど柔軟に実施されており、「今後もいろいろと改善を加えて開催していきたい」と報告をいただきました。

集落ごとに行われた
「ご近所サロン」の様子



病院への送迎サービスの様子

コロナ禍でも必要とされる 送迎と居場所を継続

栃木県佐野市

NPO法人まごの手

助成金額 15万円

「かゆい所に手が届く、柔軟で迅速な支援を」と2005年に任意団体としてスタートしたまごの手。助け合い・支

え合いを大切に、家事支援や送迎サービスを実施。また、日中一人でいる高齢者、話し相手を求める高齢者、自分にもできることがあるのではという高齢者のために、利用者から借り受けた空き家で居場所も開催してきました。ここ数年の人材不足とコロナにより、家事支援の継続が難しくなりましたが、送迎サービスと居場所は必要としている人たちのために何としても継続

したいと、本基金の助成に応募されました。

コロナによる利用の自粛や行政からの自粛要請で利用収入が減少しましたが、助成金で保健衛生費、水道光熱費、家賃、保険料、車両燃料費、車の修繕費を支払い、運営の厳しさを乗り越えられたそうです。

「まごの手に関わるすべての人が、活動すべきか、利用すべきか、自粛すべきか迷った1年でした。しかし地域社会はまごの手の活動を不要とは捉えませんでした。感染対策を取りつつ、今後でもできる限り活動を継続させていきます」と意気込みを報告してくださいました。

東京都豊島区

多世代に食料配布。まずはつながり、 困りごとに寄り添う支援を

NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

助成金額 15万円

豊島子どもWAKUWAKUネットワークは、地域の子どもを地域が見守り育てるために、遊び、学び、暮らしをサポートする居場所を地域に創出。困窮家庭への入学応援

金給付、子ども食堂、夜の児童館のほか、居場所では地域住人同士がつながり、知っている関係になることで、困ったときには互いに助け合う共生地域を目指しています。

数年前から、困窮している子育て世帯に食品ロスの食材を提供する場をつくり、経済支援と孤立予防支援を実施してきましたが、コロナ禍で活動が拡大。生活に困っている多世代の住民からも問い合わせを受けるようになりました。そこで、問題が深刻になる前にと、多世代型食料支援「としまハローフード」を実施。本基金には、そのための食料費として助成をお申し込みいただきました。

豊島区からもこの活動を周知してもらい、多団体とも連携して、昨年11月の第3水曜日に延べ62名に食料を配布。仕事が見つからず路上生活を余儀なくされた70代の男性や、夫が早朝から深夜まで不在の中、一人悩みながら生後2か月の赤ちゃんを育てている30代の女



としまハローフードの食料配布

「地域助け合い基金」 状況のご報告

性などから話を聞き、それぞれ関係機関や支援のための団
体につないでいったということです。

「コロナ感染拡大により未だ先が見えない中、失業や収入

減の不安、家庭内ストレス等を抱える人がいる。食料を介
してまずはつながり、関係構築、困りごとに寄り添うこと
ができる支援だと実感している」との報告を下さいました。

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成し
ている「地域助け合い基金」。

2月15日までの状況をご報告いたします。

(2月15日 当財団ホームページ開示時点)

◎寄付受付額

211件

3145万3336円

このほかに当財団より9千万円を供出

◎助成実行額

664件

1億1017万8897円

コロナ禍を乗り越え、地域共生社会を実現する活
動のスタート・継続が促進されますよう、引き続き
皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。
(事務局長・内田)

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、
助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参
考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、
およびクレジット
カード決済は、Q
Rコードもご利用
ください！

基金に関するご意見・お問い合わせ

＜地域助け合い基金担当＞

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

遺骨はどこへ

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

作家で政治家であった石原慎太郎さんが、2月1日に亡くなりました。

石原氏は著書で「葬式不要、戒名不要、我が骨は海に散らせ」と書いていたといいます。

弟の裕次郎さんは、死後数年経って、慎太郎さんの手で遺骨の一部が相模湾に散骨されました。海を愛し続けた兄弟は、共に海に眠ることになるのでしょうか。

近年、散骨や樹木葬等に関心が高まり、葬儀や葬送のあり方は実に多様化してきました。死んだら墓に入るのが当たり前と考えてきましたが、そんな時代はとうに去り、遺骨の行き先は墓だけではなくりました。特に有名

人の散骨がマスコミに取り上げられることもあって、その認知度は高まり、業者も増えてきました。

私は一度、友人の叔母様の散骨に立ち合った経験があります。叔母様は生涯独身で過ごし、跡継ぎはいません。自分の墓も用意していませんでした。生前から海に散骨してほしいと、ただ一人の姪である私の友人に話していたと言います。友人はその遺志を尊重し、業者に依頼して実施しました。

船の出航は、東京湾の晴海。事前に、公共の桟橋を使うので喪服ではなく普段着でという連絡がありました。公共の場所なので、レ



ジャー客などへの配慮が必要だったものと思われます。

同乗者は遺族、友人、知人、合わせて17名。それに船長と、セレモニーの進行や安全航行にあたるクルーが2名。船内には小さな祭壇が設けられ、叔母様の遺影が花に囲まれて置かれていました。暖房が効き、トイレも男女一つずつ整備されており、想像していたよりも居心地のいい空間でした。

散骨地点は羽田沖です。晴海からはおよそ40分で到着。その間船内では、友人たちが順に故人との関係や思い出を語り合って過ごしました。散骨地点に到着すると私たちはデッキに出て、パウダー状になった遺骨を少しずつ海に撒き、冥福を祈りました。遺骨は事前

ルだそうです。次いで献花。色とりどりの花びらが水面に浮かび、様々な模様を描きだします。遠

くには羽田空港ターミナルが見え、時折飛行機が姿を見せます。全員で黙祷をした後、船は汽笛を鳴らしながら散骨ポイントを3周し帰路につきました。大海原に消えていく汽笛の、何ともの悲しかったことでしょうか。初冬の、風もない穏やかな陽差しが慰めとなりました。

こどもを持たない人生を歩む人たちが増えている今、入る墓がない、あっても入りたくない、墓は高いなどで、遺骨の行き先が見つからないという現実に向面しています。死後のことは家族に任せれば安心という時代は終わり、元氣なうちに自ら死後のことを決めておかなければならなくなりました。私は両親の眠る「家の墓」に入りたいと思っています。しかし墓を守り、供養してくれる跡継ぎはいません。間もなく春のお彼岸。墓に詣で「これからどうしましょうかねえ」と、相談してこようと思います。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退職後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

「地域助け合い基金」で コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

皆様からのご寄付をお待ちしています

1. 寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含みます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

2. 税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

3. ご寄付の方法

(1) 銀行振込によるご寄付

三井住友銀行 浜松町支店（普通）口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店（普通）口座番号 0095446

（口座名義 ※いずれも同様）

公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

(2) 郵便振替によるご寄付

（口座記号番号） 00110-7-709627

（加入者名） 公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、ひと言応援コメントなどをご記入ください。また、手数料不要の払込取扱票をご用意いたしますので、お申し出いただければ郵送いたします。

(3) クレジットカードによるご寄付

21ページのQRコードもしくは当財団ホームページよりお申し込み下さい。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

<寄付・助成のお問合せ>
地域助け合い基金担当

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755
メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・

ご寄付者の皆様のご紹介

NEWS & にゅーす

さわやか活動日記(抄)





新地域支援事業・

各地の動き

(2022年1月1日～31日)

- 全国各地で、
推進の支援をしています
- 活動の一部を紹介しています

SC生活支援コーディネーター

住民に参加を呼びかける支援

(住民対象のフォーラムや勉強会の支援等)

羽生市 (埼玉県)

13日/羽生市で担い手養成講座「ボランティア講座『地域デビュー はじめの一步』」が開催され、当財団が講師を務めた。参加者40名。

市社会福祉協議会からは、同市社協

主催の有償ボランティア「はにゆうささえ愛隊」についても説明があった。続いて財団から、助け合いの大切さを話し、有償ボランティア活動について埼玉県内の事例や動画を紹介した。

その後、同市内で積極的に活動しているボランティアから活動報告が行われた。元消防士・元自治会長で第1層協議体委員長でもあり地域からも慕われている斉藤隆氏は、はにゆうささえ愛隊としての活動だけでなく、地域で空き家の草刈りなどを行う「羽生本気会」を結成し、草が伸びて見通しが悪くなった道路周辺などの草刈りを行っている。長谷川光男氏は、子供会会長をはじめとして常に地域活動に関わっており、住民からさまざまな困りごとが寄せられ「今日行くところ」が毎日あってうれしいと話した。看護師の妻と一緒にカレーなどを作り一人暮らし高齢者にお裾分けもしている。「ボランティア活動を行ったきっかけは何か」との質問に対して、両氏は「生

活の一部となっている。気づいたらやっていた、ありがとうと言われるとやってよかったと思う」と話した。

財団からは、ボランティアはできることをできる範囲で行えばよく、皆さんの力を生かせる場であり、尊厳ある生き方や、地域貢献、体を動かし自分の健康にもつながるとコメントした。やらされ感がなく、元気でいきいきとした斉藤氏、長谷川氏の話は参加者の気持ちを促し、助け合いに対する気持ちの醸成につながったようだ。(岡野)

SC研修・情報交換会等に協力

志木市 (埼玉県)

19日/志木市のSC連絡会議が行われ、第2層SC4名、第1層SC1名、行政担当者、オブザーバーとして行政の前担当者が出席。市内のSC連絡会でさまざまな課題が出ているため当財団がアドバイザーを求められ、オンラインで協力した。

第2層協議体について、メンバー間

の温度差や、どうしてもＳＣが提示する議題に対して協議体メンバーが意見を言うというスタイルになっているとのこと。協議体メンバーが主体的に話し合いを行っている協議体の見学を勧め、県内近隣の協議体と空き家活用を見学し、ＳＣに話を聞いてみてはどうかと提案した。また、協議体では何でも「難しい」で終わってしまうということでも、もう少し細かく何に困っているのかを聞き、理由が分かれば対処方法も考えられることを伝えた。住民主体の意識については、勉強会や情報交換会の効果を話し、財団も支援できることを話した。第２層ＳＣからも、コロナ禍でもあり活動の地域差も見られることから、情報交換会開催が適切ではないかと意見が出て、さっそく第１層ＳＣが企画案を検討し、次回の連絡会で共有することとなった。（岡野）

愛知県

13・17・19日／愛知県の生活支援体制整備事業に係る県レベル研修に当財団

が協力した。この研修は、同県でこれまで実施した、昨年６月の新任者向け基礎研修、７月の現任者を含めた実務研修に続く第３部として位置づけたもの。県内自治体に、来年度の本事業推進に向けた戦略検討を促すことを狙いとし、ＳＣや各関係機関の担当者だけでなく、担当課の管理者を参加者に含め実施した。

今回も全面オンラインで開催されたが、自治体ごとに戦略を検討するため１自治体１会場の形式とし、さらに県内を５ブロックに分け、１回あたりの参加自治体数を減らすなどの工夫で意見交換の時間を充実させた。また、事例の紹介には神奈川サミットの分科会の動画を活用した。

研修では、３ステップごとに制度振返りと事例確認を行い、グループワークによる課題の整理と、来年度の事業推進の戦略をまとめた。各自治体が多めた戦略は研修後に県庁に提出することになっており、県レベルのバツ

クアツプの視点から、県庁が集約して資料にまとめ、県内全自治体に配布する予定。次年度の計画検討に貴重な共有資料となる。（長瀬）

金沢市（石川県）

18日／「地域包括支援センターと生活支援コーディネーターの地域づくりに関する意見交換会」が金沢市社会福祉協議会の主催で開催された。本研修は、同市社協に配置されたＳＣと中学校圏域に配置された包括が住民主体の活動創出に向けて積極的に連携し、お互いの強みを生かして協働していくことを目的に、昨年度に続き実施されている。当財団は、リモートで「地域包括支援センターとＳＣの協働」をテーマに講義を行い、続いて市内３地区の事例が市社協と包括のそれぞれから報告された。アンケートでは「有意義だった」「ぜひ継続してほしい」という声が多く寄せられていた。（高橋）

福井県

26日／「令和３年度 生活支援コーデ

* ３ステップ：ステップ①体制づくり、ステップ②ニーズと担い手の掘り起こし、③助け合い創出

イネーター情報交換会」が福井県主催で開催された。同県では、昨年11月に「生活支援コーディネーター全体研修会」（参加者約70名）を開催し、住民主体の活動創出の具体的な取り組みについて研修を行った。

今回は、その内容をさらに深めるとともに、SCの横のつながりをつくっていくことを目的としている。意見交換のしやすさを考慮し、少人数で3回実施することとしており、今回は第1回目。コロナの影響により、完全オンラインでの実施となったが、ニーズの把握、担い手の発掘、活動創出などについて、オンラインでのグループワークと全体での情報交換を行いながら共有していった。（高橋）

京都府

12月8日／京都府で生活支援体制整備事業推進のためのオンライン研修会が開催され、当財団も協力。参加者はSCや行政、保健所職員等の約60名。

府からのSC配置状況等についての

説明の後、財団からSCの役割とその機能について講演を行った。地域包括ケアシステムや体制整備事業の基本的な制度説明、支え合いを広めていくためには共感を拡大していくことが大切であることなどを伝えた。

事例報告は、同府久御山町社協第1層SCによる協議体立て直しの取り組み、舞鶴市第2層SCよりコロナ禍での横のつながりづくりから協議体発足までのプロセス、精華町のさわやかインストラクターで「NPO法人みんなの元氣塾」副理事長・古海りえ子氏と精華町包括の第2層SCによる居場所活動と体制整備事業についての報告。財団からまとめとして、「居場所づくりが総合事業に発展した事例として、現場視察ができる」とい「SCと行政との連携も進んでいる」「居場所の連携も進み、生活支援へ活動を広げている」とコメントした。

グループワークは、この日の制度説明や事例報告の感想と、今後生かせそ

うな点について意見交換。SCからは「自分の地域でも居場所は増えているが、どう生活援助に広げていくか考えていきたい」、行政職員からは「SCだけでなく行政職員が動くことも大切」等の意見が出た。

最後に財団より、「久御山町の事例からは、機能する協議体をつくること。舞鶴市の事例からは、既存の活動を生かして話し合いの場をつくり困りごとを見つけ、担い手を増やしていくこと。精華町の事例からは、居場所から関係性をつくり生活支援に広げていく。体制整備事業は総合事業の受け皿ではなく、助け合いを広げていくための事業。今までの活動を応援していくことも大切」と伝えた。

次回は、2月上旬の意見交換会の予定。（目崎）

県と来年度事業等の打ち合わせ

新潟県

19日／新潟市の「実家の茶の間・紫竹」

にて、新潟県庁担当の石見恭子氏、地域の茶の間創設者の河田珪子氏、当財団で、今年度事業や来年度事業について打ち合わせと情報交換を行った。

同県が来年度、有償ボランティアの研修を進めていきたいと河田氏に相談。4月以降、財団も一緒に計画していくと共有した。また、新地域支援事業が始まり7年目、行政の異動やSCの交代等もあり、行政とSCの連携が弱い自治体が目立つことも共有した。他県でも同様の課題があることやその対策を共有し、来年度のアドバイザー派遣は、体制の見直しや庁内連携などストップ①が柔軟に使えるようにする方法もあるのではないかと伝えた。2月には、今年度の個別支援の報告会と情報交換会がオンラインで実施される予定。
(鶴山)

市の戦略会議に協力

新潟市（新潟県）

19日／政令市である新潟市全体の戦略

を立てる戦略会議が開催された。これまでも市の福祉部長、担当課長、担当者、政策調整監、支え合いのしくみづくりアドバイザー河田珪子氏、当財団が、市全体の状況を共有し戦略を立てながら推進してきた。今回も、SCらの成長ぶりやコロナ禍での課題などを共有しながら、戦略会議のあり方についても議論した。

新地域支援事業が始まった当初から戦略的に推進してきた同市の地域包括ケア推進モデルハウスは、市と住民の協働による居場所。そこに住民が主体的に参加し、コロナ禍での助け合いについても住民同士が議論している。終了後、モデルハウスを見える化していくことの必要性なども河田氏と共有した。
(鶴山)

協議体の活動・編成等に協力

尾花沢市（山形県）

18日／尾花沢市で助け合い創出のための住民勉強会が開催され、当財団がオ

ンラインで協力、山形県のさわやかインストラクター加藤由紀子氏は現地で協力した。

同市は、2018年12月に住民勉強会を行い何人かの住民の心に火がついたが、19年3月のフォーラムはコロナ禍で中止。昨年4月に就任した第1層SCから財団に依頼があり、勉強会を2回行って助け合い創出を始めていくということになった。

参加した住民は約40名。財団の講演「助け合っていきいきと暮らす地域をつくろう」の後に実施した「助け合い見える化チャート」では、「ご近所の助け合い」「居場所」に全員が「欲しい」と手を挙げた。気運が高まったのか、終了後には話し合う人たちも見られ、アンケート結果も前向きな回答が多かった。

市では第1層SCを中心に2回目の勉強会を開催し、助け合い創出を進めていく予定。
(鶴山)

白岡市（埼玉県）

18日／白岡市第1層協議体で、委員交代に伴う意識統一のための勉強会が行われ、当財団が講師を務めた。参加者は第1層協議体委員10名、第2層SC2名、行政職員2名（1名は第1層SC兼務）、オブザーバーで埼玉県庁より1名。

生活支援体制整備事業が創設された背景、ガイドライン、協議体の役割、協議体の取り組み事例など事業の概要を説明。また、コロナ禍で活動再開支援を行っている第2層SCや協議体委員である行政区長、民生委員、老人クラブ向けに、コロナ禍の活動事例も紹介した。

質疑応答で協議体委員より、「すでに地域で行っていることをなぜ新たに協議体を設置してやらなければならないのか」との質問が出された。財団からは、地域で必要な活動の話し合いや、創出できる体制が取れているのであれば、既存の組織を第2層協議体と考え

ることも可能であることを伝えた。また、「活動の創出ではなく、既存の組織や活動をもっと伝えていくことも大切なのではないか」との意見には、既存の活動の活性化や周知も活動創出と考えてよいことを伝えた。「各活動がつながらずに閉鎖的であることや、コロナ禍で活動自粛となる中でどう活動を創出するのか」という質問に対しては、活動者同士のネットワーク形成も協議体の役割・メリットであり、どうしたら活動ができるかを考え、できる活動から始めればよいことを話した。同市の新体制での体制整備事業に期待するとともに、今後必要に応じて支援していきたい。（岡野）

美里町（埼玉県）

24日／美里町松久地区で第3回目の住民勉強会が開催され、当財団が協力。感染対策として短時間での開催となったが、27名が参加した。

最初にSCが前回の振り返りを行い、財団からは「コロナ禍だからこそつな

がりや助け合いが必要であり、住民でできることから始めていくことが大切」と伝えた。

グループワークでは、地域をより良くするためにできる活動について具体的に話し合ってもらった。発表でどのグループにも共通していたのは、コロナ禍でもできる活動をまずは行いながらニーズを探っていきたいというもの。一例として、ウォーキング活動が挙げたが、朝晩散歩する中で、一人暮らし高齢者などの気になるお宅の見守りや、ごみ拾いや買い物支援など、気になる課題を発見したり、できる生活支援もあるので、コロナ禍でもできる活動からとにかく始めたらどうか、という理由からだった。

発表後、すでに活動している同町大沢地区の第2層協議体メンバー3名に、「今は困っていないけれども、将来自分たちが困るときがいずれ来ることを考え、今からできることで進めていきたい」と思って活動している」等、協議体で活

動する思いやこれまでの活動の内容を話してもらった。終了後アンケートでは、協議体に「ぜひ参加したい」との回答が10名。この回答者を中心に、今後、行政担当者なども含めて委員を検討し、2月下旬に第2層協議体を発足する予定。

長野市（長野県）

（岡野）

25日／長野市では、32地区ある住民自治協議会に地域福祉ワーカーが配置されており、第2層SCを兼務している。市では定期的に「地域福祉ワーカー連絡調整会議」を開催してきており、今年度5回目となる今回は、コロナ禍により全てオンラインで実施することになった。

当財団ではこれまでに、ステップ①と②をテーマとした会議に協力している。今回は、ステップ③を中心に説明し、グループワークも実施した。オンラインでのグループワークは初めてで不安を持つ参加者も多かったが、アンケートでは「いい経験になった」「ス

ムーズにできた」との声も多かった。

（高橋）

アドバイザー派遣事業に協力

神奈川県

28日／神奈川県のアドバイザー派遣事業について、今年度の振り返りと来年度の支援方法についてオンラインで会議を行った。出席者は、県担当者、当財団（丹、鶴山、沼崎）、さわやかインストラクター島津禮子氏。

今年度、アドバイザー派遣希望があり支援を実施したのは6市町村。県から、来年度の進め方について、新たな提案があった。財団からは、関係者の勉強会にとどまらず、来年度に向けて住民に働きかけることで地域が変わっていくことを、資料に基づいて説明した。このSCと協議体の3ステップごとの役割について各地の事例を入れた資料がわかりやすいので、次年度のアドバイザー派遣事業への募集の際も活用したいとの意見を県からいただいた。

今年度から始まった同県のアドバイザー派遣事業だが、来年度はさらに良い支援となり、県内にモデル的な動きが生まれるよう、県と協力して進めていきたい。

（鶴山、沼崎）

市川三郷町（山梨県）

21日／山梨県のアドバイザー派遣事業として、「第30回 市川三郷町にあつたらいいな！をつくる会議」（第1層協議体向け勉強会）の1回目に当財団が協力。1月6日にはオンラインで県、SCと共に、2回行う研修の狙いや内容を議論して組み立てておいた。この日は、同町社協の第1層SC、町役場担当者、第1層協議体メンバーが参加。生活支援体制整備事業（SCと協議体の具体的な役割）の理解と、第2層協議体づくり推進チームの選抜を狙いとした。第1層SCから勉強会趣旨説明と、町からの報告の後、財団・鶴山から「今、助け合いを広げる時（わがまちの目指す地域像を考えよう）」として講義。第2層の体制づくり



情報紙

助け合いの
仕組みづくりを
さらに進めよう

生活支援コーディネーターと
協議体の取り組みを考える情報紙

『さあ、やろう』

vol.18

近日発行!

主な内容

- ◆ 座談会 国民が望む子ども・子育て政策は何か
- ◆ 鼎談 SC・協議体の任務
— 企業への働きかけは生活支援コーディネーター・協議体の任務か —
- ◆ 連載企画 地域再生への道
・ 提言 日本の閉塞を打ち破る住民主体の活動 堀田 力
・ のみ地域力強化支援ファンド（石川県能美市）
・ 宮津市民いきがい・助け合い基金（京都府宮津市）
- ◆ 地域共生アイデア募集の受賞団体・個人の概要 ほか

お問い合わせは広報まで TEL (03) 5470-7751

に向けて、目指す地域像から話し合おうと呼びかけ、多様な助け合い活動の事例を紹介したほか、SCと協議体の役割等についても伝えた。

その後のワークショップでも「目指す地域像」と「あったらいいなと思う支え合い活動」について話し合ってもらい、各グループが発表した。財団からまとめ、各グループから出ていた「子どもたちも参加する取り組み」について、どんな人たちを推進体制に入ってもらえばよいのか投げかけた。

「目指す地域像」の話し合いでは、「2層3層の必要性」や「住民にどう理解を広げていけばよいのか」など住民主体を進めるというイメージが共有された。

2回目は2月21日に実施予定。今後もし引き続き勉強会を通じてサポートしていく。

東郷町（愛知県）
24日／東郷町で第2層協議体編成に向けた大づかみ方式勉強会が開催された。当財団は、この取り組みに愛知県の助

言者派遣事業を通して、住民向けの情報提供で協力した。勉強会開催に向け、関係者も事前ヒアリングを行うなど丁寧な準備を進めてきた。参加者からは、前向きな質問が多く出されるなど関心も高く、想定していた2圏域の協議体の立ち上げにつなげることができた。

今後の住民主体の活動に期待がかかる。

（本稿は、岡野貴代、高橋望、鶴山芳子、長瀬純治、沼崎未来、三上宗佑、目崎智恵子）

（長瀬）



Vol.16

Vol.17



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2022年1月1日～1月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (65件)

(都道府県別50音順)

茨城県	池ノ上 和夫	坐古 桂一	下畑 穰治
栃木県	重田 百合子	篠野 隆宣	鈴木 宏量
菅野 安子	鈴木 章雄	ソエダ シゲミ	玉木 康平
芳賀 マサ子	鈴木 美智子	鳥飼 重和	中井 郁子
群馬県	館 里枝	肥口 ふみ枝	松下 明夫
恩田 初男	滑川 里美	丸山 哲史	柳 久美子
田中 恵子	藤本 裕一郎	山谷 恵美子	吉田 信正
埼玉県	三上 彬	神奈川県	有賀 満雄
新井 章子	東京都		
石井 初枝	木下 清		
中神 吉且	熊谷 展一		
西野 優子	金野 京子		
千葉県	櫻井 郁利		
伊藤 壽弘	佐生 綾子		

さわやかパートナー法人 (6件)

(50音順)

株式会社青山製作所
長野県生活協同組合連合会
日本フレイバー工業株式会社
株式会社ニフコ
ポッカサッポロフード&ビバレッジ株式会社
NPO法人隣の会

一般ご寄付 (6件)

(50音順)

齊藤 治一 (2万円)
清水 勇三郎 (3万円)
故苦米地 正章 ご遺族 (14万5000円)
中野 曹一 (2千円)
一般社団法人日本メンズファッション協会
(5万3000円)
匿名希望 (1万円)

大澤 哲夫	平井 昌利	河合 峯	京都府	奈良県	香川県
川原田 武	圓山 賢吾	静岡県	小田 和夫	オクタニ カユリ	野口 満里子
小山 俊司	新潟県	石津 道弘	小田 幸子	和歌山県	高知県
白井 哲三郎	須田 貴子	原 章	大阪府	田中 衣子	中平 由起子
高松 清美	石川県	愛知県	前東 ふみ子	広島県	佐賀県
中川 敬士	安嶋 是晴	笠原 盛泰	兵庫県	島本 幸子	田中 健一
中野 曹一	岐阜県	中山 隆雄	大森 みのり	吉原 寛	

地域助け合い基金ご寄付（5件）

（ご寄付日付順）

関 順子（10万円）

NPO法人隣の会（10万円）

ボランティア・ベンダー協会（1万円）

匿名希望（10万円）

株式会社八洋（1万円）



2022年度

さわやか福祉財団 全国交流フォーラムについて

2021年度は、財団創立30周年を記念した全国交流フォーラムを開催いたしました。2022年度は、今後の感染状況を踏まえて、開催方法等詳細を4月上旬までに財団ホームページや本誌にてお知らせいたします。

なお、日程と場所は次の通り予定しています。

日 程：2022年5月25日（水）

場 所：東京・両国

NEWS

& にゅーす



2021（令和3）年度 「連合・愛のカンパ」 助成先が決まりました

立ち上げ支援プロジェクト

今年度も「連合・愛のカンパ」による支援を行いました。「連合・愛のカンパ」は、日本労働組合総連合会（連

合）より組合員の方々のカンパを提供いただいて、地域の助け合い活動団体の立ち上げや新規事業の立ち上げを支援する目的で1997年より25年にわたり継続しています。

今年度の募集期間は昨年10月12日から11月末までとし、例年通り、当財団ホームページなどに加えて、全国の社会福祉協議会や各地のNPOセンター等にもご協力いただいて周知しました。結果、29都道府県62団体から応募をいただきましたが、新型コロナウイルス

感染が収まらない中、影響を受けやすい子どもや障がい者、生活困窮者を支援する活動を行っている団体からの応募が多く見られました。また、地域共生社会の実現に向け、多世代共生やリサイクルといった活動を行っている団体からの応募もあったことや、さらに、普段活動を共にしたり情報交換を行っている生活支援コーディネーターや社

会福祉協議会から推薦を受けて応募いただいた団体も多数に上っていたことから、活動内容や地域での活動範囲の広がりを感じ取ることもできました。

協議の結果、次ページの18団体に合計262万4000円を助成いたしました。愛のカンパの助成金で助け合い活動を立ち上げることができ、現在でも活動を継続している団体は数多く、長年にわたり資金を提供していただいている連合組合員の皆様に、心より感謝申し上げます。

コロナの影響で助け合いのニーズは高まっています。生活支援コーディネーターらを中心とした助け合い創出の取り組みがさらに盛んになり、本助成金により助け合いの創出に生かされることを期待しています。最後に、ご応募いただきました全国で活動されている皆様に対し、深く敬意を表します。

（内田 信幸）

2021(令和3) 年度「連合・愛のカンパ」助成18団体

- 上宝沢あおぞら応援隊 (山形県山形市)
- 精神障がいのある方と地域で共に歩む会 (山形県山形市)
- いいざか子ども食堂いっしょに (福島県福島市)
- ふたご@鹿沼 (栃木県鹿沼市)
- B. Jバスケット (埼玉県鴻巣市)
- NPO法人どんぐり (東京都江東区)
- NPO法人関東シニアライフアドバイザー協会江東部会 (東京都江東区)
- こどもとおとな食堂 (東京都練馬区)
- 子育て支援S.A.Nの会0-8 (東京都練馬区)
- ママもわたしも楽しむ親子ひろばまのこ (東京都国分寺市)
- はままつファイト!! レガール (静岡県浜松市)
- ダイヤランド暮らしの応援隊 (静岡県函南町)
- 子どもの居場所応援団「あいあい」 (愛知県春日井市)
- NPO制服バンク石川 (石川県金沢市)
- つむぎ (大阪府大阪市)
- ひよこっこクラブ (大阪府守口市)
- 石見地域安全推進協議会 (島根県邑南町)
- 災害弱者安心ネットワーク高松 (香川県高松市)

■都道府県別応募と助成状況

●応募：29都道府県 62団体 ●助成団体：11都道府県 18団体

都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成
北海道	1		群馬県	2		愛知県	2	1	京都府	3		愛媛県	3	
岩手県	2		埼玉県	2	1	岐阜県	1		大阪府	4	2	香川県	1	1
山形県	3	2	千葉県	2		三重県	1		兵庫県	2		大分県	3	
福島県	3	1	東京都	12	5	石川県	2	1	岡山県	1		熊本県	1	
茨城県	2		神奈川県	1		福井県	1		島根県	1	1	沖縄県	1	
栃木県	1	1	静岡県	2	2	滋賀県	1		山口県	1		合 計	62	18

さわやか活動日記(抄)

〈2022年1月1日～1月31日〉

社会参加推進事業

社会人地域参加推進プロジェクト

高連協役員会開催

【1月26日】

高齢社会N.G.O.連携協議会(高連協)役員会をウェブ会議形式で開催。N.P.O.法人高齢社会をよくする女性の会理事長樋口恵子氏と当財団会長堀田力両共代表参加の下、9名の理事及び監事1名、計12名が参加した(欠

席者1名は委任状提出)。

議題は、来る3月29

日開催の総会に向けて、

①21年度会員状況及び

21年度予算執行見込み、

②22年度事業計画につ

いて、③22年度予算計

画について、④22年度

年間スケジュールにつ

いて、の4つ。結果、

22年度事業計画は、21

年度から継続する政策

提言及びそのための調

査事業として、①「高

齢女性の雇用を含めた

社会参加」について研

究提言する事業、②

「助け合いによる社会

参加」について研究提

言する事業、③「厳し

い社会情勢(財政・人

材)の状況を見据えた

上での高齢者の身体的

な支援ケアをどう持続

維持していくか」を研

究提言する事業、の3

つの事業とし、③の事

業は社会情勢を見極め

ながら展開を考えるこ

ととした。手上げ事業

は、①「超高齢社会に

おける社会教育」特に

団塊の世代の社会参加

をどう図るか」(公益

財団法人社会教育協会

②「企業OBに地域社

会の助け合い活動への

参加をうながすための

事業」(公益財団法人

さわやか福祉財団)の

認められた。

また、事業計画に基

づいた予算案も承認さ

れ、会員活動の情報

共有及び高連協の活動

の広報強化、新規会員

拡大への予算案を総会

にて図ることとした。

(玉置)

職員訃報

故長澤 良彦さん(82歳没)

当財団で2002年以来およそ20年にわたりボランティアスタッフとして貢献された長澤良彦さんが、2月6日にお亡くなりになりました。

長澤さんは、スポーツを通して「お年寄りには喜びを、選手には社会貢献活動を、子どもたちには労りの気持ち」をモットーに、各地の高齢者施設を訪問し開催している「スポーツさわやか広場」を担当され、サッカーやバスケットボールを通じて、たくさんの笑顔を創り出してくださいました。この「スポーツさわやか広場」は開始以来、開催回数220回を超え、参加者も延べ2万名を数えます。長澤さんにはその多くに関わっていただきました。謹んでご冥福をお祈り申し上げますとともに、これまで故人にお寄せいただきましたご支援に心より御礼申し上げます。

みんなの広場



楽しみながら

老いていける日本に

小川 真也子さん 55歳

東京都

昨年12月号の村田幸子さんのエッセイ、「死ぬまで楽しく」は、父が高齢者ホームにお世話になるようになりいろいろと感じていたこととびったりマッチして、心に響きました。何度も何度も読み返し、ダイバージョナルセラピーという考え方が早く日本に浸透し、それぞれが楽しみながら老いていく日が来ることを願って止みません。

いい考え方は、心ある人を動かします



これからの住民の
コミュニケーション

二井矢 道生さん 83歳

大阪府

昨年12月号「活動の現場から」の記事。「瓜破北地域の情報を発信するLINE公式アカウントもつくった」「すでに登録者は90名を超えていて、便利だと好評です」とのこと。これからのコミュニケーション方法として、特にマンションではこのような活用が望まれるような気がします。具体的な進め方が分かればよいのですが…。

進んでますね!?



『さあ、言おう』投稿募集



あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。

ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など

投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前のほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添え下さい。大変参考になります。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX (03) 5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



私たちはふれあいふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

法人
年会費
(1口)

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります（所得税の寄付控除額の上限は所得の40%－2000円）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵に

はり絵・池田げんえい



「菜の花」

編集後記 ●「挑む！ 我らの地域づくり」は、長野県小布施町の協議体とSCにフォーカスしました。住民の熱量が伝わればと思います（P4～）。●「活動の現場から」は、大学生による高齢者らへの生活支援。心優しい若者たちの堅実な活動創出は心強いกำลังใจです（P11～）。●「連合・愛のカンパ」の助成先が決定しました（P35～「NEWS&にゅーす」）。●先祖代々の墓に入らず、散骨を考える人は増えているようです（P22～「老いの暮らしを創る」）。●「居場所ガイドブック」を改訂しました。ご活用ください（裏表紙）。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

佐藤 良子

コロナ禍の中でわかった人と人とのふれあいの大切さ、
顔の見える関係をはぐくみ、

自分事として助け合える地域にしていくなこと、

その中で生じてくる「気になる」ことに

視点を変えた見方も大切な活動です。

仲間と助け合うことに生きがいを感じ、

人の心を動かす支援のあり方、

それに生きがいをもって一緒に活動してくれる仲間を

称賛することもやる気を引き出す一つです。



- 立川市大山団地自治会相談役
常に「人の心」「人との和」
を大切に、助け合える新しい
地域ネットワークを目指して
活動中。

さあ、3月号

通巻343号 2022年3月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

【改訂版】

『いつでも誰でも行ける場所を広げよう！』

居場所ガイドブック

ぜひご活用ください！

好評の『居場所ガイドブック』を改訂いたしました。「いつ行ってもいい、誰が行ってもいい、何をしてもいい」共生型常設型居場所のコロナ禍における好事例を追加。自分らしく過ごせる場所がある安心感、また、地域の絆をより深め、助け合う関係を広げるための居場所づくりのノウハウと事例が盛りだくさんです。

【目次】

1章 居場所ってなに？

2章 居場所のつくり方

- 1 ひ と 思いを持った人を中心に仲間を広げていく
- 2 も の 拠点となる場所や物品
- 3 おかね 立ち上げ資金や運営資金
- 4 情 報 周知・PR
- 5 運営のコツ

3章 居場所の事例（21事例）

- 1 基幹型
- 2 交流型
- 3 イベント型
- 4 食事会型、「子ども食堂」
- 5 その他

4章 活動に対する支援のあり方

民間による支援／行政による支援の基本的考え方／補助金・助成金以外の行政の支援

5章 「新しい総合事業」(通いの場)の活用



お問い合わせは当財団まで (03) 5470-7751

本書のPDFは、当財団のホームページからダウンロードもできます。

勉強会など大人数での使用にどうぞご利用ください。

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/public-relation-tool/>